

北海道のラムサール湿地の現状と課題

牛山 克巳

(宮島沼水鳥・湿地センター／北海道ラムサールネットワーク事務局)

1. はじめに

北海道ラムサールネットワーク（以下HRN）は、道内12箇所のラムサール湿地の現場で、日常的な保全管理やCEPA活動に携わる自然系施設、NGO、市町村で構成されるネットワークである。HRNでは、道内のラムサール湿地が抱える共通の課題を洗い出し、全体としてその対策を講じると共に、個別に行われている効果的な取り組みについて共有することを目的に、湿地の保全とワイズユースに関するアンケート調査を実施したので、ここに紹介する。

2. アンケート調査

アンケートでは、4つのテーマ（外来種対策、湿地環境の変化、地域づくりとCEPA、COP11に向けて）に関して、現状と対策、専門家等への質問事項などについて自由回答で記述してもらった。アンケートは、10湿地11団体から回答を得ることができた。

外来種対策と湿地環境の変化に関し、いくつかの共通する脅威を見いだすことができた。一方、それらへの対策は独自に行われているものが多く、他地域の事例に関する質問が多く寄せられた。また、専門的なアドバイスを必要としているサイトも多く見られた。

地域づくりとCEPAに関し、どこも地域住民を主なターゲットとしているものの、他機関との連携や効果的な手法などの面で課題を抱えていることが判明した。

COP11に関する質問に対しては全体的にコメントが少なく、決議文やハンドブックに関してもあまり利用されていない現状であった。

3. 考察と提言

湿地の保全管理とワイズユースには地域の独自性が必要とされるという考えから、情報共有や広域的な取り組みが進んでいなかったと考えられる。一方、今回のアンケート結果からは共通する脅威や課題が浮かび上がり、地域単独の取り組みには限界があると感じられた。近年人材育成を目的とした湿地間の交流はいくつかもたれているが、共通する課題や脅威の解決に向けた広域的な取り組みが必要となっていると言えるだろう。一方、地域の取り組みを支えるため、専門家のアドバイスを得られたり、ラムサール条約の情報を共有できたりする仕組みも必要と考えられる。湿地学会がそのような機能を果たすことを期待したい。

アンケートに協力頂いた以下の方々に深謝の意を表す。

釧路国際ウェットランドセンター（斉藤さゆり）、ウトナイ湖サンクチュアリ（中村聡）、サロベツ・エコ・ネットワーク（嶋崎暁啓）、とんこり堂（稲垣順子）、雨竜沼湿原を愛する会（佐々木純一）、宮島沼の会（牛山克巳）、霧多布湿原トラスト（河原淳）、網走市（平野雅久）、春国岱原生野鳥公園（手嶋洋子）、浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館（小西敢）、別海町野付半島ネイチャーセンター（河口真梨、大野木智子）